

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2015

課題番号：23720013

研究課題名(和文)生物学・心理学がベルクソン哲学に与えた影響に関する文献的・実証的研究

研究課題名(英文)Historical study of the influence of physiology and psychology on Bergson's philosophy

研究代表者

三宅 岳史 (Miyake, Takeshi)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：10599244

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではベルクソン哲学と当時の心理学と生物学との関係を明らかにし、生物学は 個体発生(ドリーシュ)と 系統発生(ヴァイスマン)について、心理学は 精神物理学(フェヒナー、リーマン)と 記憶の科学に焦点を絞った。研究成果は以下の通りである。

：「ベルクソンとドリーシュの目的性概念」を『フランス哲学・思想研究』2015年に掲載。：未発表。：2014年に国際学会発表、その一部邦訳「リーマンと心理学、そして哲学」を『現代思想』2016年3月臨時増刊号に発表。：2015年に国際シンポジウムでBergson and the Rise of the Sciences of Memoryを発表

研究成果の概要(英文)： In this research, I clarify the relations between the philosophy of Bergson and the sciences at that time, particularly biology and psychology. I focus on the four points: biological topics 1. Ontogeny (Driesch), 2. Phylogeny (Weismann) and psychological topics 3. Psychophysics (Fechner, Riemann), 4. The sciences of memories. This research's results are as follows.

1: "The concept of finality of Bergson and Driesch", Revue de Philosophie Francaise, vol. 20, 2015, pp. 168-179. 2: I cannot publish the results of research about this theme yet. 3: "Historical Investigation of the concept "Multiplicite" Riemann, Bergson, Deleuze", The 2nd International Deleuze Studies in Asia Conference, 2014, University of Osaka. "The psychology and philosophy of Riemann", Revue de la pensee d'aujourd'hui, vol. 44-6, March 2016,. 4: "Bergson and the Rise of the "Sciences of Memory", 7th International Workshop of Project Bergson in Japan 2015, Hosei University.

研究分野：哲学

キーワード：西洋哲学史 哲学・倫理学

## 1. 研究開始当初の背景

ベルクソン研究は、これまでは解釈者が独自の視点からベルクソンのテキストに読み込むことが多かったのに対し、現在では、厳密なテキスト分析や文献的調査を踏まえた実証的研究が主流となっている。

フランスでは Frédéric WORMS(リール第三大学)の研究を初めとし、Paul-Antoine MIQUEL、Élie DURING、Arnaud FRANÇOISなどの新たな研究者たちが現われ、精力的に活動している。また、国内でもこの流れに呼応する形で杉山直樹、平井靖史、檜垣立哉らなど新たなベルクソン研究者層が形成されつつあり、ベルクソン研究もまた隆盛を見せている。

本研究もベルクソンの忠実なテキスト読解に立ち戻ろうとする点で以上の研究動向と軌を一にするものである。研究代表者はこのような国内外のベルクソン哲学の研究動向の中で、そこで用いられている実証的な手法を用い、一貫してベルクソン哲学と同時代の科学との関係に関して研究を進めてきた。とりわけ数学・物理学とベルクソン哲学との関係に関して、幾つかの学会発表や論文にまとめてきた。

本研究では以上を踏まえたうえで、さらに当時の生物学・心理学がもっていた科学的・哲学的問題を明らかにする。それにより、実証科学全体がどのようにベルクソンの哲学的概念の生成に影響を与えたかをより体系的・包括的に提示するという成果が見込まれる。

## 2. 研究の目的

ベルクソン哲学と当時の生物学・心理学の関係に関する研究を進め、そのなかでも以下の i)~iv) にテーマを絞って研究を進める。

i) 個性の問題( 個体発生をめぐる議論) 有機体概念と生理学

ii) 種の進化の問題( 様々な進化論とベルクソン哲学の関係)

iii) 数学と心理学の問題( リーマン幾何学の多様体論をめぐる言説) 精神物理学における感覚の数値化( 感覚量・内包量) の問題

iv) 心身問題( 失語症と大脳局在論)

まず、生物学に関しては個体発生と系統発生という観点に分類を行って研究を行う。次に心理学については、『意識の直接与件についての試論』(以下『試論』と略記する)で問題になった感覚の数量化と『物質と記憶』で問題になった記憶の局在論についてそれぞれ扱う。

これらの内容は、当時議論されていた(現在でも形を変え議論されている)哲学的、科学的な諸問題を中心にまとめたものである。

## 3. 研究の方法

研究方法はベルクソンのテキストの生成に関連の或る当時の科学資料(心理学と生物学)についてデータベースを作成したうえで、

資料を収集し、それらの資料の分析・読解を行う。

1年目は、個性(individualité: 分割不可能な全体性)の問題を扱うことにしたい。この問題は、生物や有機体が単なる物質と異なり、全体として調和し、組織的に機能するのはなぜかという問題である。これは生物がもつようにみえる目的性をどのように扱うかという問題であり、『創造的進化』第1章で議論されている。とりわけ当時、実証科学との関連で議論になっていたのは、個体発生で見られる胚の個性性についてであり、主にドリーシュとベルクソンの関係を研究する。

2年目については、種に関する生物学的議論を扱う。前年度の個性の問題と関連づけることで、当時、進化論が有していた問題を明らかにし、とりわけ獲得形質の遺伝に関する当時の科学的文脈を明らかにする。そのためには獲得形質の遺伝を否定したヴァイスマンの文献とそれを巡る論争に特に焦点を当てた研究を進める。

3年目は、心理学とベルクソン哲学の関係へとテーマを移し、ここで、感覚を数値化して扱う感覚量の問題について二つの側面から焦点を当てる。それは、リーマン幾何学と心理学の問題(『試論』第1章)とフェヒナーの精神物理学(『試論』第2章)の問題に関してである。

4年目は『物質と記憶』の第二章の注で挙げられている失語症の文献を精読し、これも大脳局在論とその批判という科学史的議論の文脈を明らかにする。『物質と記憶』第2章で挙げられている文献は非常に量も多く、ドイツ語の学術論文の参照なども多く含まれるが、それらを踏まえた研究は進んでいない。

以上の研究計画は研究代表者がすべて単独で行う。文献資料などはフランス国立図書館を中心に収集予定である。幾つかの研究テーマが深化して遅れを生じた場合は、研究テーマの数をより絞ることで対応する。にしたい。

## 4. 研究成果

(1)個性をめぐる問題の研究に関しては、ドリーシュとベルクソンの関係を研究することを中心に進めた。その研究は、1.『創造的進化』で批判される内的目的性(目的性を個体発生に限定する立場)にドリーシュは留まっていたのか、2.なぜ新生気論の科学的文脈で内的目的性という問題の設定が問題になるのか、3.ベルクソンとドリーシュの目的性概念の異同、そして相互の影響関係はどのようなものか、という3つの問題から構成された。

この問いに答えるために、ドリーシュの文献を読解した(Driesch 1899, 1905, 1908a, 1908b, 1909, 1914a, 1914b など)。

それぞれの問いに関して判明したことは、1に関しては、ドリーシュは初期の著作では

内的目的性という概念の立場に留まっていたが、ベルクソンが『創造的進化』の出版の最中にちょうどその立場を超え出ていく。その原因はベルクソンによる批判というよりは、ドリーシュの新生氣論の内的な発展にあったということを示した。

2に関しては、当時の科学的背景を踏まえつつ、ドリーシュの知的なバックボーンが、ヘッケルのような進化と個体発生を同一の理論内で論じる立場への批判から出発して、そのため自らの研究対象を個体発生の厳密な研究に限定しようとするところがあり、それが内的目的性の概念と結びついて理解されやすい素地があったという見解を示した。

3に関しては、まず両者の類似点として、目的性の概念として調和概念に訴えていること、そしてドリーシュのエンテレヒー概念が内的〔内包的、強度的〕多様性と呼ばれ、計測不能とされている点はベルクソンの持続概念と類似しており、またエンテレヒーもエラン・ヴィタルもエントロピーの物質が無秩序へ向かう速度を遅延させるという機能を持ち、この点では共通点が存在していることを見た。

相違点としては、ベルクソンの生命の概念は心理学に訴えられるのに対し、ドリーシュのエンテレヒーは心理的存在でないこと、また前者が根本的に時間や生成のなかでとらえられるのに対し、後者は時間の外におかれること、ドリーシュは目的論の立場に留まるのに対し、ベルクソンは目的を生成に従属させるという意味で目的論を超えることを示した。

本研究は2014年3月に日仏哲学会(会場: 京都大学)で発表を行った。その後、問いの3に絞って研究を進め、その成果は研究論文という形で『フランス哲学・思想研究』第20号(2015年)pp. 168-179に掲載された。

ベルクソンとドリーシュに関しては、両者とも生氣論者として位置づけられ(このような位置づけはドリーシュによる著作の影響が大きい)るが、両者の関係に焦点を絞った先行研究はほとんど存在しない。例えば論集Burwick & Douglass (2010) *The Crisis in Modernism* では副題に「ベルクソンと生氣論論争」とつけられているものの、ドリーシュとベルクソンの関係はいずれも二次的な扱いである。またドリーシュの思想を再評価する米本昌平『時間と生命』(2010)でも、両者の関係に関しては軽く触れられる程度である。

したがって、本研究の独自性は非常に高いと考えられ、また個性や目的性という哲学や生物の概念に関して、哲学史や思想史といった側面からも重要な視点を提供するものである。

(2) 系統発生に関する研究に関しては、本来ならばヴァイスマンとベルクソンの関係、

とりわけヴァイスマンの生殖質の連続性の議論とベルクソンのエラン・ヴィタルの議論を関係づけるはずであったが、ヴァイスマンとベルクソンとの関係が予想以上に研究しなければいけないことが広がり、まとめることができなかった。

具体的にはヴァイスマンとベルクソンの関係の研究に入る前に、ヴァイスマンをめぐる獲得形質の論争については様々な文献資料が存在し、そのすべてを整理するのに膨大な時間がかかると判断されたために、口述の(3)や(4)の研究が先行してしまい、最終的に(2)を具体的な研究成果として示すことができなかった。

ヴァイスマンとブラウン＝セカールに端を発する獲得形質をめぐる論争については、文献調査 Weismann 1892, Brown-Squard 1869, 1892 も行い、一部翻訳を作成し、研究メモやノートも取っている。これらの研究に関しては、研究ノートをもとにさらに調査を行い、いずれは発表か論文の形でまとめることにしたい。

(3) 感覚量の数量化に関する研究については、数学者リーマンの多様体概念とベルクソンの多数性 *multiplicité* という概念の関係を研究した。これらを関係づけて独自の哲学的体系を発展させたのが、ジル・ドゥルーズであることはよく知られている。

ここでは、リーマンが影響を受けたと述べている哲学者ヘルバルトの多様性概念について研究を行い、とりわけその心理学に登場する多様性を概観した。そこでは多様なものがまず感覚として与えられ、そこから時間や空間、数、数、強度量、音調や色調などが「系列形式」として形成されることを見た (Herbard 1891)。

次に、このようなヘルバルトの発想がリーマンの多様体論に活かされているという説 (近藤 2008) を確認し、リーマンの数学的発想の裏に物理学的な発想があり、さらにはそこに心理学や形而上学的概念も関連していることをリーマンのテキストを通して見ることができた (Riemann 1891)。

さらには、リーマンとベルクソンの多様性概念の関係を見るために、ベルクソンが『試論』第3章で参考文献としてあげているジョン・スタロの議論を参照した (Stallo 1888)。そこでスタロはリーマンの議論を引きつつ、批判的に考察しており、リーマン、スタロ、ベルクソンの量概念について整理を行った。それによるとリーマンは量を最も一般的な観点から統一的に把握しようとしており、それに対してスタロはリーマンのこのような量の理解が混同を含んだものとして批判している。ベルクソンは、リーマンのような量一般概念を認めない点でスタロと同じであるが、スタロと異なるのは量に対して室という概念をもちだす点である。

最後に、ドゥルーズはこのような観点から

見るとリーマンの量概念の立場に最も近く、その意味では『差異と反復』第5章で見られるベルクソンの質概念への批判が理解される(Deleuze 1968)。ただしドゥルーズはリーマンの量概念には見られなかった性質(分割によって本性を変える多様体)をみずからの哲学に持ちこんでおり、それはベルクソン哲学の解釈(Deleuze 1966)から生じていることを示した。

これらの研究成果に関しては、2014年6月に大阪大学に行われた「第二回ドゥルーズ・スタディーズ・アジア国際会議 The Second International Deleuze Studies in Asia Conference」で英語により発表(“Historical Investigation of the concept "Multiplicité (Mannigfaltigkeit)"— Riemann, Bergson, Deleuze —”)を行った。

またこの研究に関しては、一部内容を加筆修正して日本語の研究論文としても2016年3月の『現代思想』臨時増刊号に「リーマンの心理学、そして哲学」として掲載された。この雑誌はリーマン没後150年の特集であったため、主にリーマンの心理学とその背後にある哲学に関してテーマを絞った。

また2014年の研究発表では、展開されずにとどまっていたフェヒナーの精神物理学や形而上学(Fechner 1851)とリーマンの思想を関連づけることができた。

このように本研究は、国外では国際シンポジウムの研究発表という形で、国内では『現代思想』という雑誌でその成果を示すことができた。

ただし、本来ならば、フェヒナーとリーマンだけではなく、フェヒナーとベルクソンの関係をベルクソンの『試論』第1章にまでわたって研究を展開すべきところであるが、これに関してはまた非常に多くの労力を要する研究となることは容易に予測できるため、今後の課題としたい。

(4) ベルクソンと失語症の研究に関しては、ベルクソンのテキストのなかでは最も参考文献が多い箇所であり、また関連研究分野も非常に多種多様であるため、本研究においては、イアン・ハッキング『記憶を書きかえる 多重人格と心のメカニズム』で述べられている「記憶の科学」という整理を参考にした。

それによれば、ベルクソンが『物質と記憶』を上梓する前に「記憶の科学」が成立したのであり、それは表層知識と深層知識から成るが、前者はさらに3つに分けられ、1) 想起についての実験的研究、2) 異なるタイプの記憶の局在化の神経学的研究、3) 記憶の精神的力動論から構成される。

本研究ではベルクソンが『物質と記憶』であげる参考文献をこの3つに分類し、それらがベルクソンの哲学的概念形成にどのような意味や影響をもっていたのかを分析した。

1)の想起の実験的研究に関してハッキング

が創始者として挙げているのは、エビングハウスであるが、『物質と記憶』にもこの想起の実験的研究の系譜につながるような一連の研究たちの実験が参照されていることを明らかにした(ゲオルク・エリアス・ミュラーやウィリアム・ジョージ・スミスなど Smith 1886)。

また、これらの実験的研究が『物質と記憶』のなかでは「注意」という文脈のなかで用いられ、3)の記憶の精神的力動論で出てくるリボーの注意概念の批判にもつながっていることを示した。

2)の脳機能局在論については、ハッキングはその創始者をブローカと述べているが、我々は記憶の局在論に関しては、ヴェルニッケがその創始者にふさわしいと論じた。

それはブローカが失語症研究において、大脳の各部位に機能を局在させたものの、個々の記憶表象を脳細胞に局在させることに関しては懐疑的であったためである。これに対してヴェルニッケは記憶を脳細胞に局在させることに積極的であった(Wernicke 1874)。

このようなヴェルニッケの局在論には当時も賛否両論が存在したが、本研究ではその議論に明確に反論したフロイトの失語症の議論について注目し、そのベルクソンの議論との共通点についてまとめた(Freud 1891)。

またこれらのヴェルニッケの議論が失語症の図式に対する大量の議論を生み出し、ベルクソンの運動図式という概念もこれらの議論が背景になっていることを示した。

3)の記憶の力動論に関して、ハッキングが挙げているのは、実証的心理学の確立を目指したりボーである。ここでは我々はリボーとベルクソンを比較し、ベルクソンのリボー批判には、リボーが形而上学を排して科学としての心理学を示しているにもかかわらず(Ribot 1881)そこには形而上学的前提(機械論)があるという洞察が中心にあり、これに対してベルクソンは形而上学的前提を排除しない実証科学を打ち立てようとしていたことを示した。

これらの研究は、ベルクソンと当時の心理学について実証的に分析しようという本研究の意図をよく表しているものである。このような研究手法でベルクソンと科学の関係を明らかにしているものは、おそらく先行研究にも存在せず、非常に独創的なものである。とりわけ、本研究のフロイトとベルクソンの比較に関しては、両者の思想的関係について論じられる議論の中ではあまり言及されてこなかったように思われる。

また、本研究は2015年12月に法政大学、明治大学、京都大学で行われた国際シンポジウム 7th International Workshop of Project Bergson in Japan 2015『物質と記憶』を解剖する」で“Bergson and the Rise of the “Sciences of Memory””というタイトルで英語によって発表された。

国内では今後、このシンポジウムの論集と

して出版される予定である。

最後にこれらの科学研究費によって行われた研究の成果は、科学研究費補助金研究成果報告書『生物学・心理学がベルクソン哲学に与えた影響に関する文献的・実証的研究』として2016年3月にまとめられた。

#### 引用文献

- Brown-Squard, Charles (1869) «Nouvelles recherches sur l'épilepsie due à certaines lésions de la moelle épinière et des nerfs rachidiens» in *Archives de physiologie normale et pathologique*, t. II.
- Brown-Squard, Charles (1892) «Hérédité d'une affection due à une cause accidentelle. Faits et arguments contre les explications et les critiques de Weismann» in *Archives de physiologie normale et pathologique*, 5<sup>e</sup> série, t. IV.
- Burwick, Frederick & Douglass Paul (2010) *The Crisis in Modernism : Bergson and the Vitalist Controversy*, Cambridge university press.
- Deleuze, Gilles (1966) *Le Bergsonisme*, Presses Universitaires de France.
- Deleuze, Gilles (1968) *Différence et Répétition*, Presses Universitaires de France.
- Drisch, Hans (1899) *Die Lokalisation morphogenetischer Vorgänge: Ein Beweis vitalistischen Geschehens*, Verlag von Wilhelm Engelmann.
- Drisch, Hans (1905) *Der Vitalismus als Geschichte und als Lehre*, Verlag von Johann Ambrosius Barth.
- Driesch, Hans (1908a) „Henri Bergson, der biologische Philosoph“ *Zeitschrift für den Ausbau der Entwicklungslehre*, Jahrg, II, Heft1/2.
- Driesch, Hans (1908b) *The Science and Philosophy of the Organism*, Adam and Charles Black.
- Driesch, Hans (1909) *Philosophie des Organischen*, 2er Band, Verlag von Wilhelm Engelmann.
- Driesch, Hans (1914a) *The Problem of the individuality*, Macmillan.
- Driesch, Hans (1914b) *The History and Theory of Vitalism*, trans. Ogden, Macmillan.
- Fechner, Gustav Theodor, (1851) *Zend-Avesta, oder über die Dinge des Himmels und des Jenseits; vom Standpunkt der Naturbetrachtung*, Voss.
- FREUD, Sigmunt, (1891) *Zur Auffassung der Aphasien*, Franz Deuticke.
- Hacking, Ian (1995) *Rewriting the Soul: Multiple Personality and the Sciences of memory*, Princeton University Press.
- Herbart, Johann Friedlich (1891) *Lehrbuch zum Psychologie*, in Joh. Fr. Herbart's Sämtliche Werke in Chronologischer Reihenfolge, Vierter

Band, von Hermann Beger.

- 近藤洋逸 (2008) 『新幾何学思想史』筑摩書房
- RIBOT, Théodule (1881) *Les maladies de la mémoire*, 18<sup>e</sup> éd.(1906) Félix Alcan.
- Riemann, Bernhart (1891) *Gesammelte Mathematische Werke und Wissenschaftlicher Nachlass*, Zwite Auflage, von B. G. Teubner.
- SMITH, William George (1895) « The Relation of Attention to Memory », *Mind, a Quarterly Review of Psychology and Philosophy*, G. F. Stout (éd.), Londres, Williams and Norgate, vol. IV, New Series, pp. 47-73.
- Stallo, John (1888) *The Concepts and Theories of Modern Physics*, D. Appleton.
- 米本昌平 (2010) 『時間と生命』書籍工房早山
- Weismann, August (1892) 1892: *Aufsätze über Vererbung und verwandte biologische Fragen*. Fischer, Jena.
- Wernicke, Carl, (1874) *Aphasische Symptomencomplex*, Max Cohen & Weigert.

#### 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

三宅岳史「ベルクソンとドリーシュの目的性概念」『フランス哲学・思想研究』vol.20, 査読有, 2015年, pp. 168-179.

三宅岳史「リーマンと心理学、そして哲学」『現代思想』臨時増刊号 総特集：リーマン, 査読無, vol. 44-6, pp. 161-175.

三宅岳史「ベルクソンと「記憶の科学」の台頭」についてはシンポジウム論文集の一部として出版準備中である。

〔学会発表〕(計3件)

三宅岳史「ベルクソンとドリーシュの目的性概念」, 日仏哲学会, 2014.03, 京都大学(京都府京都市), 査読有

MIYAKE, Takeshi, “Historical Investigation of the concept "Multiplicité (Mannigfaltigkeit)"—Riemann, Bergson, Deleuze —”, The Second International Deleuze Studies in Asia Conference, Deleuze Studies, 2014.06, 大阪大学(大阪府豊中市), パネリスト, 査読有

MIYAKE, Takeshi, “Bergson and the Rise of the “Sciences of Memory””, 7th International workshop of PBJ (Project Bergson in Japan), 2015.12, 法政大学(東京都千代田区), パネリスト, 査読有

〔図書〕(計1件)

三宅岳史(2012)『ベルクソン哲学と科学との対話』京大学術出版会, 1-218 ページ

〔その他〕

ホームページ等

香川大学研究者総覧詳細

<http://www.ceda.kagawa-u.ac.jp/kudb/Servlet/RefOutController?exeB0=WR4100RBO&monitorID=WR4100&workType=detail&primaryKey=1000028128&kyoinID=&gyosekiNendo=null&secondaryKey=&dummyKyoinID=&currentPage=4>

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

三宅 岳史 ( MIYAKE, Takeshi )

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：10599244